▼研究ノート

第一次世界大戦をめぐる開戦責任問題の現在

――クリストファー・クラーク『夢遊病者たち』によせて――

村上　亮

1　はじめに

本稿は、第一次世界大戦が勃発するまでの経過を叙述したC・クラークの著書『夢遊病者たち――第一次世界大戦はいかにして始まったか』（以下、『夢遊病者たち』）を糸口として開戦責任をめぐる近年の議論をたどることを目的とする。[1]

第一次大戦の開戦（戦争）責任問題については、誰が大戦を引き起こしたのかという点が注目され、とくにサライェヴォ事件（一九一四年六月二八日）からイギリスが参戦するまでの期間、いわゆる「七月危機」については非常に多くの研究が蓄積されてきた。「九〇〇万人以上の死者、一九〇〇万人以上の負傷者に鑑みると、この膨大な犠牲、言い尽くせぬ惨状の責任が誰にあったのかという問いかけは至極当然のものである。もしこの問題を避けて通るならば、歴史学は破綻するだろう」[2]とのU・ヴルヴァの言葉は正鵠を射るものだろう。

最初に筆者が確認しておきたいのは、開戦責任をめぐる議論が歴史学において初めて「修正主義」の対象となった事実である。[3]パリ講和会議において締結されたヴェルサイユ条約第二三一条は、ドイツとその同盟国のみに戦争責任を認めた。[4]ドイツはこの正当性を否定しようと試み、あくまで自国にとっては「防衛戦争」である旨を強調した。その後の議論の概要については後述するため、このドイツの責任の比重が現在まであたかも「振り子運動」[5]を続けていることのみを指摘しておこう。

本稿で取りあげる『夢遊病者たち』は「なぜ」ではなく、「どのように」して大戦に至ったのかという視座から議論を展開し、国際関係に重点をおく。同書は刊行直後から「クラーク・シンドローム」[6]にたとえられる大きな反響を呼び、日本語をはじめとする各国語に翻訳された。[7]当該問題に精通する研究者もまた『夢遊病者たち』に注意を向けている。W・マリガンは、L・アルベルティーニ書以来の包括的な著作と評し、A・モンバウアーはF・フィッシャー書と同様の衝撃を与えるとともに、この問題に従事する将来の研究者に「議論の新たな展開と参照軸を提供する」と展望した。[8]もっとも、『夢遊病者たち』への異論や反論にも留意したい。はたして、クラーク書にはいかなる疑問が投げかけられているのだろうか。開戦責任論争がわが国の大戦研究では詳らかにされ

ていないことに鑑みると、クラーク書を軸とした動向の整理は有益と思われる。[9]

以上をふまえて本稿では、研究史におけるクラーク書の意義を浮き彫りにすることに努めたい。もっとも紙幅の都合上、開戦責任論争の経過や昨今の研究状況の立ち入った分析については他日を期すこととし、従来の議論については大要のみにとどめ、そのなかに『夢遊病者たち』を位置づけることで同書の問題点を提示してみたい。

2　第一次大戦の開戦責任研究と『夢遊病者たち』

（1）開戦責任をめぐる研究史

開戦責任をめぐる論争については、S・R・ウィリアムソンによる時代区分にクラーク書の刊行を加味すると、およそ次のように整理できるだろう。①一九二〇年代（敗戦国側の単独責任）、②一九三〇年代～五〇年代（参戦各国の責任分担論）、③一九六〇年代（フィッシャー論争）、④一九七〇年代～二〇〇〇年代（ドイツを重視する責任分担論）、⑤二〇一二年以降（『夢遊病者たち』をめぐる論争）の五段階である。[10]ここで議論の経過を瞥見しておく。

冒頭で述べたように、敗戦国ドイツは自国に開戦責任がないことを示すため、政府と学界が一体となって宣伝活動を展開した。そのひとつが、全四〇巻に及ぶ『グローセ・ポリティーク一八七一‐一九一四』に結実した外交資料の公刊である。[11]これが他国にも同様の動きを促し、大戦に至る外交史研究はおおいに進展した。そのなかでとくに影響力をもったのは、元イギリス首相D・ロイド・ジョージの視座、すなわちヨーロッパ諸国は「戦争という沸騰する鍋に引きずり込まれた」[12]のであり、大戦勃発は列強諸国の誤解や偶然が重なった結果とみなすものである。このいわば「魔法の言葉」[13]は、対立の鎮静化に貢献したといえる。

論争に再び火をつけたのは、前掲のフィッシャーによる『世界強国の道』である。フィッシャーは、かねてより戦争を計画していたドイツがサライェヴォ事件を機に、オーストリア・ハンガリー（以下、ハプスブルク）を戦争へと突き動かし、故意に世界大戦を引き起こしたと論じた。[14]フィッシャーはドイツの開戦責任の大きさを認めた最初のドイツの歴史家といえるが、彼の所論をめぐって学界のみならず、政界やメディアをも巻き込む激しい論争が展開された。[15]G・G・イッガースによれば、フィッシャー説の核心は「七月危機」におけるドイツの責任の大きさとドイツの戦争目的を貫く攻撃的性格にある。さらにフィッシャー説の意義として、①外交と国内の政治、経済、社会的要素の関係に目を向け、いわゆる「内政の優位（H・ウルリヒ・ヴェーラー）」[16]を提起したこと。②第一次大戦からヒトラーへと至るドイツの政策の連続性を示唆したことも補うべきである。[17]

フィッシャー論争後の動向については詳論する余裕がないので、ここではモンバウアーの考察を提示しておく。①前掲の「内政の優位」については意見が一致していないこと。②フィッシャーの視線がもっぱらドイツに向いていたため、それに応じて参戦各国に関する研究が進展したこと。③他国に比べ、相対的にドイツの開戦責任が重いとみなされてきたことである。モンバウアーは自著の刊行時点（二〇〇二年）において、フィッシャーの主張は――ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世が軍部の首脳陣たちとともに、戦争に向けた準備を協議したとする――「戦争評議会」の位置づけとドイツの戦争目的を除き、大筋で受け入れられている旨を記す。[18]

いまひとつ注意すべきは、一九九〇年代を境とする責任分担論の変化である。D・スティーヴンソンは、ハプスブルクに対するドイツの支持（「白紙小切手」）が軍事行動に優先権を与えたことを認めつつ、ドイツとハプスブルク双方がサライェヴォ事件の前に戦争を決断していたとはいえないとする。つまりドイツの行動が「世界強国」を企図したとするフィッシャー説を否定した。さらに彼はロシアの部分動員令が危機を増幅させたとしたうえで、ロシアがフランスより「白紙小切手」を得ていたと指摘する。後で見るように、露仏関係についてのこの視座がクラークを先取りしていたことは強調されてよい[19]。さらにフィッシャー派の研究者も分担論を受け入れていた点は重要である。フィッシャーの弟子にあたるI・ガイスによれば、大戦勃発に関するドイツの責任は一九九〇年代初頭には九割を占めていた。その後、それは七割から八割まで減少した分、ロシアやセルビアの比重が増したという[20]。

（2）クラーク書の主旨

以上をふまえたうえで、クラーク書の主旨を簡単に整理しておこう。まず挙げるべきは、セルビアへの注目である。クラークは、セルビアにおける「テロリズムと陰謀の伝統」が「外交・内政両面での不安定要因をつくった[21]」とのJ・ジョルの示唆を敷衍したといえる。彼がハプスブルク寄りのセルビア国王オブレノヴィチ夫妻の暗殺（一九〇三年）から話を起こしたのは、読者にセルビア政治の粗暴さを印象づける意図があると考えられる。また、セルビアの膨張をロシアが煽り、フランスが間接的にそれを支援したとする、クラーク独自の「バルカンを着火点とするシナリオ[22]」も見逃せない。

セルビアへの批判的論調は、サライェヴォ事件後の経過に関する叙述にもあらわれている。つまりクラークは、「七月危機」が戦争に至った一端をハプスブルクとドイツの政策に求めたものの、セルビアやロシアに対する視線はより厳しい。そのひとつはハプスブルクがセルビアに突き付けた諸要求、いわゆる「最後通牒[23]」（一九一四年七月二三日）のくだりにみてとれる。つまりクラークは、ハプスブルクがセルビアに対する開戦の口実を得るために厳しい内容を突きつけたとする通説とは異なり、その妥当性を認める[24]。さらに彼は、この「最後通牒」と後のコソヴォ危機における北大西洋条約機構（NATO）のセルビア（ユーゴスラヴィア）に対する最後通牒を比較し、前者を「随分穏当」とする見方[25]さえ示す。一方、セルビアが自国の主権を侵さないかぎりですべての要求を受け入れたとする見方に対しては、その回答を「受容、条件付き受容、言い逃れ、拒否の微妙な混合[26]」にすぎないと断じた。

上記に関連してクラークは、セルビアが「最後通牒」の一部を拒絶した理由をロシアによる動員準備と推測した[27]。時のロシア外相S・サゾーノフの外交については、セルビアの領土拡張要求を容認した一方、ハプスブルクにはセルビアへの対抗措置を認めず、場合によっては軍事行動による応酬を計画したことなどをあげ、その攻撃性を力説する[28]。それは、ロシアによるバルカンの「子どもたち」の代理としての汎スラヴ的な諸要求をポピュリスト的な色彩を帯びたものであり、ヒトラーの生存圏構想よりも正当とはいえないとの一節にも看取できる[29]。この文脈では、フランス首相R・ポアンカレが、「七月危機」最中の訪露時に平和の維持よりもロシアとの同盟強化を優先し、先に述べた「バルカンを発火点とするシナリオ」に執着したとの一節にも注意したい[30]。

これらの諸点をふまえてクラークは、大戦勃発を「犯罪ではなく、悲劇」とみなし、ドイツの責任を強調する「フィッシャー・テーゼを希釈

したバージョン」に疑義を呈し、責任の追及を拒否した。彼によれば、戦争を招来したのはドイツ、ハプスブルクを含めた「各国に共有されていた政治文化の帰結」であり、その「相互作用的」な性格が大戦勃発という「現代史上最も複雑な出来事が起こった理由」と結んでいる。[31] クラークは一連の検討を通じて、ほぼ定説となっていたフィッシャー説に反駁するためにドイツとハプスブルクよりも、セルビアやロシア、フランスの好戦性に力点をおいた。もっとも彼の叙述は自ら否定したはずの「犯人捜し」、具体的にいえばロシアやセルビアの責任を随所でほのめかし、あたかもこの両国が大戦勃発の「犯人」であるとの読後感を残すものであろう。

3　クラーク書の問題点

冒頭で述べたように『夢遊病者たち』をめぐる研究者の評価は割れている。前掲のウィリアムソンは、クラークに依拠しつつ、ドイツからハプスブルクに与えられた「白紙小切手」がロシアからセルビアに、フランスからロシアにも振り出されたことがヨーロッパ戦争を招いたと述べる。[32] しかし、全体としてはクラーク書への反対意見の方が多いように思われる。フィッシャー説を支持し、ヴィルヘルム二世の責任を重視するJ・C・G・レールは、クラークによる「修正主義」を前述のロイド・ジョージの見方のような「戦間期の水準にわれわれを連れ戻すようなもの」と批判する。[33] 研究動向を概観したH・ジョーンズは、必ずしもフィッシャー説に賛同する訳ではないが、ドイツとハプスブルクの共同責任論を排することはきわめて困難と書きとめている。[34] ここではクラーク書の問題点として参戦各国の好戦性をめぐる問題、それと関連する「夢遊病者」をめぐる問題の二つを取りあげてみよう。

（1）参戦各国の好戦性

ここでの第一の疑問点は、クラークがハプスブルクの開戦決断にドイツの「白紙小切手」が不可欠であった点、ドイツやハプスブルクが他の列強諸国よりも先に戦争を最優先の選択肢とした点を軽視したことである。前出のモンバウアーは、この「白紙小切手」をベルリンがウィーンへの支持を約束したにとどまらず、この好機をセルビアとの決着をつけるために利用すべきとの「圧力」とみなし、その同盟国フランスを巻き込みかねない、ロシアとの戦争に拡大する危険を生じさせた点で「七月危機」の重要局面と評価した。[35] G・クルマイヒはベルリンとウィーンの責任を重視する点ではモンバウアーと足並みをそろえる。ただし、ハプスブルクのセルビアに対する戦争の決意はドイツに強制されたものではなかったと判断した。そのうえで、ドイツは――自国の「世界強国」化ではなく――ハプスブルクとセルビアの武力衝突の「局地化」に努めるとともに、「この機にロシアの戦争への意志を試す用意があった」[36]と論じている。

第二の疑問点は、セルビアとロシア、ならびにフランスの好戦性を過度に強調したことである。セルビア政府の行動が開戦にいたる経過に少なからぬ影響を及ぼしたことは確実だが、最初に戦争を決断したのはハプスブルクであることを閑却すべきではない。またクラークはセルビアがハプスブルクの「最後通牒」を拒絶した理由をロシアによる支持とする根拠をあげていない。確かに、ロシアの支持がセルビアの頼みの綱であったことは否定できないが、セルビアがロシア皇帝ニコライ二世から支援の確約を得たのは、最後通牒への返答（七月二五日）時点ではな

く、七月二七日とされる。[37]

なおクラークが「七月危機の諸決定のなかでも最も重大なものの一つ」[38]とするロシアの総動員令については、C・カニスが直接的な安全保障上の脅威がない状況でこれをおこなったとしてクラークと一致する一方、D・リーヴェンはドイツによるハプスブルクの抑止が戦争回避の唯一の手段であったことをあげ、その過大評価には否定的である。[39]モンバウアーは列強による交渉の余地を奪ったという理由から、ロシアの動員令よりもハプスブルクの対セルビア宣戦の方が危機を深化させたと論じる。[40]クラークの論及した「七月危機」におけるフランス大統領ポアンカレの強硬な態度についても、彼が仏露同盟の価値の再確認よりも踏み込んだ発言をした証拠はないとするのが一般的である。[41]クラークの「バルカンを着火点とするシナリオ」は、やや一面的な解釈に立脚したものと言わざるをえない。

（2）「夢遊病者」の妥当性

クラークは、「七月危機」の主要人物たちを「用心深かったが何も見ようとせず、夢に取り憑かれており、自分たちが今まさに世界にもたらそうとしている恐怖の現実に対してなおも盲目」な状態にある「夢遊病者」と表現した。[42]しかし、この点で着目すべきは「夢遊病者」の概念を最初に打ち出したのはクラークではないことである。管見のかぎりでは、大戦時の軍事計画に関する非合理性を説明する際に「ヨーロッパの諸大国が次々と、夢遊病者の不気味な密集行進のように戦争に突き進んでいった〔…〕」と記したW・マクニールが初出である。[43]

またクラークが描きだした「七月危機」の様相は、各国の指導者たちが情勢把握に努め、相手の動向を予想しながら行動していたことを裏づけるものだろう。実際に「夢遊病者」との見方には多くの疑義が差しはさまれている。前出のモンバウアーは「戦争は不慮の事故でも、過失や怠慢の結果でもなかった。一九一四年の要路者たちは「夢遊病者たち」（クリストファー・クラーク）ではなく、彼らは自身のおこなっていることに気づいていた」と反論する。彼女はパリやサンクトペテルブルクの役割を無視した訳ではないが、あくまでウィーンとベルリンの決断が戦争を招いたとみる。[44]そもそも「夢遊病者」は決定を下すことはできず、――クラークが描いた「七月危機」の要路者のように――涙を流すような感情をもっていないと述べ、「夢遊病者」という題目とクラークによる叙述の齟齬を言いあてたのは冒頭に紹介したヴルヴァである。[45]

すなわち、クラークが明らかにした「七月危機」の全貌は「夢遊病者」のさまではなく、むしろ各国の政府首脳や軍人たちが抱いていた根拠なき楽観的な見通し、敵対陣営への猜疑心、誤算の連鎖ではないだろうか。われわれは、彼らを恐るべき破局への道を進んでいることを察知していた「ポーカープレイヤー」[46]だったとみるべきではないだろうか。前出のマリガンは、「七月危機」が大戦に至った背景として、国際体制の変容や軍備拡張、民族主義の広まりを通じて外交面での安定が掘り崩されたこと、サライェヴォ事件が「ウィーン、サンクトペテルブルク、ベルリンの三首都の指導者が平和を維持することにほとんど心を向けていない瞬間に起きた」[47]ことを書いている。そのうえで、従前の国際危機とは異なり「イタリアを除いて、すべての列強はその〔全面戦争〕危険を冒すことをいとわなかった」[48]と記す。ヨーロッパ各国が「七月危機」終盤に陥った混乱を考えるうえで、以上の指摘は傾聴に値する。これらの諸研究に鑑みると、筆者は「夢遊病者」という視座にも若干の無理があると考える。

4　おわりに

クラーク書は大戦勃発に至る過程を詳説した点のみならず、「夢遊病者」という概念を用いて責任論を排した点で研究史の画期をなすものである。しかし同書は従来の責任分担論に掉さしつつ、通説を覆すに足る新史料を示さずしてセルビアとロシアの責任を過剰に非難した。すなわち『夢遊病者たち』は必ずしも創見に富む成果とは言えまい。事実、クラークのいう「フィッシャー・テーゼを希釈したバージョン」はポスト・クラーク期においても定説の位置を占め続けている。[49] ここでは研究史の総括はできないため、現時点でもっとも穏当と思われるJ・レオンハルトの一節をあげておく。「ドイツは〔ハプスブルクが最後通牒を手交する〕七月二三日までの状況を利用してセルビアと決着をつけるべくウィーンに圧力を加えたかどで、七月危機のなかで格別の責任を負っている。しかしながらこの見方が各国の動向、とりわけロシアとフランスの政策を度外視しているのであれば不完全なままである」[50]と。以下、本稿に関する若干の展望を記しておきたい。

『夢遊病者たち』で批判の的となったセルビアでは、大戦はハプスブルクやドイツからの侵略に対する自衛戦争、解放戦争と捉えられている。[51] それをふまえれば、「セルビアに衝撃的な批判を浴びせた、つまり「明白なかたちで野蛮な政治的文化」を証明した」[52]クラークへの非難も十分にうなずける。D・ヴィドイコヴィチは、近年のセルビアへの批判を念頭におきつつ、クラーク書に歴史修正主義の傾向を読み取っている。すなわち「夢遊病者」という用語を用いながら、実際にはセルビアにより重い開戦責任を割りあてていると論じた。彼の眼には、クラークによるセルビアとロシアへの責任転嫁が大戦をめぐる「ヨーロッパの記憶文化」にとってきわめて心地よいものと映じたのである。[53]

最後にモンバウアーによるクラーク書への警鐘を紹介しておこう。彼女は、クラークの提起を一九八〇年代の「歴史家論争」で表出した第二次世界大戦の修正主義と結びつけた。具体的には、ヒトラーの侵略的要求をヴァイマール共和国期にさかのぼらせることで、彼の責任を軽減するE・ノルテに以下のような憂慮の念を示す。「〔中略〕一九一四年の戦争責任問題の政治的、歴史政策的な重要性は明白である。もし第一次世界大戦の責任をロンドン、パリ、ペテルブルクに転嫁する論拠を押し通せるならば、ヒトラーの「ヴァイマールの諸要求」も正当化できるだろう。ドイツが一九一四年に防衛戦争をおこなったにもかかわらず、ヴェルサイユにおいて不当な方法で責任を負わされたという点で一致をみるならば、そして一九三九年に勃発した戦争を旧国境の回復に限定するならば、両大戦の戦争責任はすぐさま修正されよう」[54]。クラーク書が「大戦におけるドイツの責任を免じた」とドイツ公衆に曲解されたこと、ドイツの歴史家のほとんどがクラークの新たな修正主義に沈黙していることが、このくだりの背景にあると思われる。[55] われわれはモンバウアーの警句を想起しつつ、『夢遊病者たち』に向きあうべきではないだろうか。

【付記】
本稿は、日本学術振興会ＪＳＰＳ科研費、基盤研究Ａ（１７Ｈ００９３５）「一九一八‐一九年像の再構築――継続と変容――」（代表：大津留厚、二〇一七年～二〇二〇年）の助成による成果の一部です。

注

（1）本稿は、筆者による書評を下敷きとして、第一次世界大戦の開戦責任論争を整理するものである。村上亮「書評　クリストファー・クラーク（小原淳訳）『夢遊病者たち――第一次世界大戦はいかにして始まったか』」『西洋史学』第二六五号、二〇一八年、七七‐七九頁。

（2）Ulrich Wyrwa, “Zum Hundertsten nichts Neues. Deutschsprachige Neuerscheinungen zum Ersten Weltkrieg (Teil I)”, *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, Jg. 62-11, 2014, S. 940.

（3）歴史学研究会編『歴史における「修正主義」』青木書店、二〇〇〇年、xi頁。

（4）ここでは「戦争責任」を「第一次大戦はドイツの侵略によって開始、遂行されたものである。侵略が不正な、犯罪的行為である以上、第一次大戦に関して否定的評価を受くべき諸々の結果は、侵略者たるドイツの負担によって解決されねばならないという主張」と規定しておく。大沼保昭『戦争責任論序説：「平和に対する罪」の形成過程におけるイデオロギー性と拘束性』東京大学出版会、一九七五年、六〇頁（注六）。

（5）Stephan Lehnstaedt, “In der Endlosschleife? Debatten über die Schuld am Ersten Weltkrieg von Emil Ludwig bis Christopher Clark”, *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, Jg. 64-7/8, 2016, S. 620.

（6）ゲルト・クルマイヒ（西山暁義訳）「戦争責任論争から国際化へ？――第一次世界大戦研究の回顧と展望」『ゲシヒテ』第一〇号、二〇一七年、一七頁。

（7）クリストファー・クラーク（小原淳訳）『夢遊病者たち――第一次世界大戦はいかにして始まったか』みすず書房、二〇一七年、八三五頁。

（8）William Mulligan, “The Trial Continues: New Directions in the Study of the Origins of the First World War”, *English Historical Review*, vol. 129, 2014, p. 658; Annika Mombauer, “Guilt or Responsibility? The Hundred-Year Debate on the Origins of World War I”, *Central European History*, vol. 48-4, 2015, p. 546.

（9）重要な業績として以下を参照。馬場優「ヨーロッパ諸大国の対外膨張と国内問題」小野塚知二編『第一次世界大戦　開戦原因の再検討』岩波書店、二〇一四年、四一‐六八頁。

（10）Samuel Ruthven Jr. Williamson (ed.), *The Origins of a Tragedy, July 1914*, Illinois 1981, Introduction.（頁数の記載なし）

（11）当該問題については以下を参照。石田勇治「ヴァイマル初期の戦争責任問題――ドイツ外務省の対応を中心に――」『国際政治（「一九二〇年代欧州の国際関係」）』第九六号、一九九一年、五一‐六八頁（とくに六一‐六二頁）。

（12）David Lloyd George, *War Memoirs*, vol. 1, London 1933, p. 52.

（13）Stig Förster, “Im Reich des Absurden: Die Ursachen des Ersten Weltkrieges”, in Bernd Wegner (Hg.), *Wie Kriege entstehen: zum historischen Hintergrund von Staatenkonflikten*, Paderborn 2000, S. 215.

（14）フリッツ・フィッシャー（村瀬興雄監訳）『世界強国への道：ドイツの挑戦　一九一四‐一九一八年』第一巻、岩波書店、一九七二年、第二章（五三‐一一六頁）。

（15）Konrad H. Jarausch, “Der Nationale Tabubruch. Wissenschaft, Öffentlichkeit und Politik in der Fischer-Kontroverse”, Martin Sabrow et. al (Hg.), *Zeitgeschichte als Streitgeschichte: große Kontroversen nach 1945*, München 2003, S. 20-40.

(16) この見方に関しては以下を参照。ハンス‐ウルリヒ・ヴェーラー（大野英二、肥前栄一訳）『ドイツ帝国　一八七一‐一九一八年』未来社、一九八三年（大戦勃発については、二七八‐二八九頁）。

(17) ゲオルグ・G・イッガース（中村幹雄他訳）『ヨーロッパ歴史学の新潮流』晃洋書房、一九八六年、一一三‐一二五頁（とくに一二五頁）。

(18) Annika Mombauer, *The Origins of the First World War: Controversies and Consensus*, London 2002, pp.176, 186, 208, 212, 224.

(19) David Stevenson, *The Outbreak of the First World War: 1914 in Perspective*, Basingstoke 1997, pp. 23-24 , 31

(20) Imanuel Geiss, "Deutschland und Österreich-Ungarn beim Kriegsausbruch 1914. Eine Machthistorische Analyse", in Michael Gehler (Hg.), *Ungleiche Partner?: Österreich und Deutschland in ihrer gegenseitigen Wahrnehmung*, Stuttgart 1996, S. 377.

(21) ジェームズ・ジョル（池田清訳）『第一次世界大戦の起原（改訂新版）』みすず書房、一九九七年、一二二頁。

(22) クラーク『夢遊病者たち』五二八‐五三一頁。

(23) これについては以下を参照。村上亮「オーストリア＝ハンガリー二重君主国による「最後通牒」（一九一四年七月二三日）再考――F・ヴィースナーの『覚書』にみる開戦決断の背景――」『境界研究』第七号、二〇一七年、一‐二四頁。

(24) クラーク『夢遊病者たち』六八四頁。

(25) 同書、六八三‐六八五頁。「七月危機」時のハプスブルクもコソヴォ紛争時のアメリカも当初から交渉を通じた解決の意図をもたず、戦争を仕掛けるつもりであったことには留意すべきだろう。Raju G.C. Thomas, "Wars, Humanitarian Intervention, and International Law: Perceptions and Reality", in Idem (ed.), *Yugoslavia Unraveled: Sovereignty, Self-Determination, Intervention*, Lanham 2003, p. 192.

(26) クラーク『夢遊病者たち』六九四頁。

(27) 同書、六九一頁。

(28) 同書、七一七頁。

(29) 同書、四二五頁。

(30) 同書、六五七‐六七四頁。

(31) 同書、八三〇‐八三二頁。

(32) Samuel Ruthven Jr. Williamson, "July 1914 revisited and revised: the Erosion of the German Paradigm", in Jack S. Levy / John A. Vasquez (eds.), *The Outbreak of the First World War: Structure, Politics, and Decision-Making*, Cambridge 2014, pp. 42-53, esp. 50.

(33) C. G. John Röhl, "Goodbye to all that (again)? The Fischer Thesis, the New Revisionism and the Meaning of the First World War", *International Affairs*, vol. 91-1, 2015, pp. 153-166, esp.154. クラークとロイド・ジョージの共通性は以下でも指摘される。フォルカー・ベルクハーン（鍋谷郁太郎訳）『第一次世界大戦　一九一四‐一九一八』東海大学出版部、二〇一四年、ⅷⅷ頁。

(34) Heather Jones, "As the Centenary Approaches: the Regeneration of First World War Historiography", *The Historical Journal*, vol. 56-3, 2013, p. 859.

(35) Annika Mombauer, *Die Julikrise. Europas Weg in den Ersten Weltkrieg*, München 2014, S. 42-43.

(36) Gerd Krumeich, *Juli 1914. Eine Bilanz*, Paderborn 2014, S. 79-80, 113, 128.

(37) Mark Cornwall, "Serbia", in Keith M. Wilson (ed.), *Decisions for War, 1914*, London 1995, pp. 55-96, esp. 94.

(38) クラーク『夢遊病者たち』七五七頁。

(39) Konrad Canis, *Der Weg in den Abgrund: deutsche Außenpolitik 1902-1914*, Paderborn 2011, S. 684-85; D. C. B. Lieven, *The End of Tsarist Russia: The March to World War I and Revolution*, New York 2015, pp. 337-338.

(40) Mombauer, *Julikrise*, S. 80; Idem (ed./trans.), *The Origins of the First World War: Diplomatic and Military Documents*, Manchester 2013, S. 27-28.

(41) John F. V. Keiger, *Raymond Poincaré*, Cambridge 1997, p. 167, 190.

(42) クラーク『夢遊病者たち』八三四頁。

(43) ウィリアム・マクニール（高橋均訳）『戦争の世界史』刀水書房、二〇〇二年、四一五頁。

(44) Mombauer, *Die Julikrise*, S. 118-119.

(45) Wyrwa, "Zum Hundertsten nichts Neues", S. 923.

(46) Jost Dülffer, "Die geplante Erinnerung. Der Historikerboom um den Ersten Weltkrieg", *Osteuropa*, Jg. 64-2/4, 2014, S. 354.

(47) ウィリアム・マリガン（赤木完爾、今野茂充訳）『第一次世界大戦への道：破局は避けられなかったのか：一八七一～一九一四』慶應義塾大学出版会、二〇一七年、三四四‐三四六頁。

(48) 同書、三五六頁。

(49) Andreas Gestrich / Pogge von Strandmann Hartmut, "Introduction", in Idem (eds.), *Bid for World Power?: New Research on the Outbreak of the First World War*, Oxford 2017, p. 3.

(50) Jörn Leonhard, *Die Büchse der Pandora: Geschichte des Ersten Weltkrieges*, München 2014, S. 95.

(51) Ismar Dedović / Tea Sindbæk Andersen, "Answering Back to Presumed Accusations: Serbian First World War Memories and the Question of Historical Responsibility", in Tea Sindbæk Andersen / Barbara Törnquist-Plewa (eds.), *The Twentieth Century in European Memory: Transcultural Mediation and Reception*, Leiden 2017, pp. 83-103.

(52) Wyrwa, "Zum Hundertsten nichts Neues", S. 922.

(53) Dario Vidojković, "Gavrilo Princip, Serbien und das Jahr 2014 – Neue wissenschaftliche Erkenntnisse oder am Ende (doch nur wieder) alte Zuweisungen", in Bachinger Bernhard et al. (Hg.), *Gedenken und (k)ein Ende?: das Weltkriegs-Gedenken 1914/2014. Debatten, Zugänge, Ausblicke*, Wien 2017, S. 91-93.

(54) Annika Mombauer, "Der hundertjährige Krieg um die Kriegsschuld", *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, Bd. 65-5/6, 2014, S. 323.

(55) Mombauer, "Guilt or Responsibility?", pp. 549, 551.

（むらかみ　りょう・福山大学講師）